

比較文化論 : 大項目別報告 : 武器 2800

著者	吉田 集而
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	106-116
発行年	1990-03-10
その他のタイトル	Comparative Analyses : Results : Weapons 2800
URL	http://doi.org/10.15021/00003658

武器 2800

吉田 集而*

- | | |
|-----------|-----------------|
| 1. 弓 | 4. 楯 |
| 2. 槍 | 5. よろい |
| 3. こん棒と刀剣 | 6. 投石器とサメの歯付き武器 |

武器については、それぞれの項目をひとつずつとりあげるというよりは、相互に関係のありそうな項目ごとにまとめてコメントをつけてゆこう。

1. 弓

まず弓(2803)からはじめよう。武器としての弓の分布はきわめてひろいものである。しかし、太平洋地域では武器用の弓は、きわめて限られている。まずはメラネシアまでと考えてよいであろう。その中で非常に目立つのはボルネオである。この地域だけが弓の分布がぼつんと抜けている。この地域は本当に武器としての弓を欠いているのであろうか。

そこで狩猟用の弓(1103)の分布をみてみよう。武器用の弓は狩猟用の弓と関連している可能性が高いため、これら二つの分布を重ねてみた(図1)。その結果、やはりボルネオでは狩猟用・武器用のいずれの弓も使われていない。このボルネオの特異性については後に再考することにして、さらに弓の考察をつづけてみよう。

狩猟用の弓と武器用の弓とが併用されていることが十分に期待されるが、実際の結果もそのようになっている。しかし、それでも狩猟用だけにしかつかわれない例や、武器としてのみにしかつかわれない例も少なくない。前者の例として、Ao Naga や Rengma Naga, Mon, Kachin などがあげられているが、少々疑わしい気がする。なぜなら、戦闘は近年まで続いていた例がほとんどであり、一方で家畜などの比重が増大し、狩猟がより早く脱落すると考えられるからである。この仮説に対応する例、

* 国立民族学博物館第2研究部

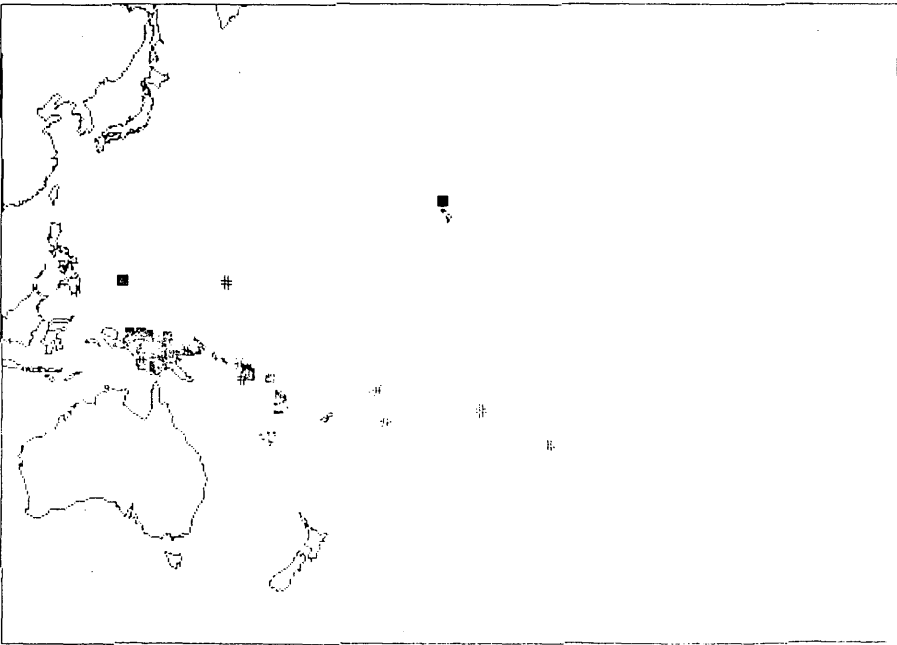
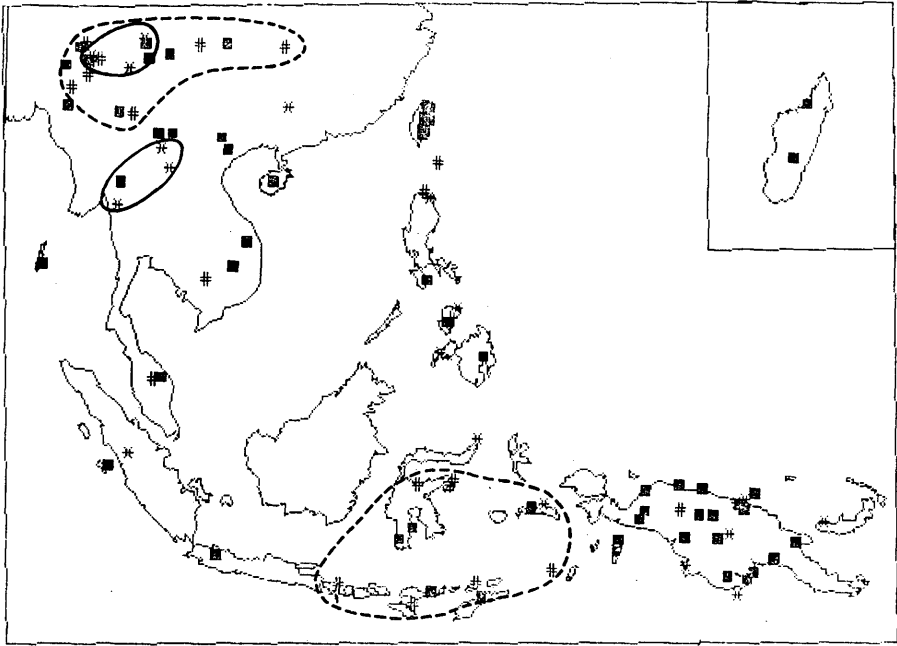


図1 狩猟用弓 (1103) と武器用弓 (2803)
■ 両方, ○# 武器用のみ, ○* 狩猟用のみ

すなわち、狩猟用弓はなくて武器用の弓が存在する例がみられる。中国南部からナガ地方にかけての地域と小スンダ列島とセレベス島およびメラネシアの一部の地域である。これらの地域では、狩猟のウエイトが落ち、武器としての弓のみがのこった地域と思われる。ただし、ニューギニアは逆で狩猟は現在でも重要な生業であり、武器としての用途の方が落ちた例である。

つぎにいしゆみ (2804) と弓を重ね合わせた分布をみてみよう (図2)。いしゆみは中国起源のものと考えられ、これが出現すると弓にとってかわられることが多い。いしゆみの方が弓より発達した武器と考えられるからである。

この分布をみてみると、いしゆみだけが分布している地域は東南アジアの大陸部の中央部だけであり、(ボルネオの **Kayan** は例外である)、その分布あるいは周辺地域では弓といしゆみを併用する民族が分布している。弓をのこしている民族では完全にいしゆみに切りかわらなかつたことを示している。ところで、この分布図で少々奇妙なのは、いしゆみが中国からもたらされたとする、中国南部の **Lolo** や **Chin** にいしゆみがみられないことである。中国の影響というのは意外にかたよったものである可能性がある。

弓のないボルネオに関連して、吹矢 (1101) を取りあげておこう。吹矢の分布は意外にひろく、マダガスカル島からナガ地方、**Karen** や **Lakher**、さらには **Vietnamese**、そしてマレー半島、スマトラ、スラウェシ、フィリピンそしてボルネオ島におよんでいる。その中でとくにボルネオは弓なしの吹矢の見られる地域である。ただし、武器としては、後のべる刀剣が重要である。

2. 槍

つぎに槍 (2815) の分布をみてみると、弓の分布よりは均一でさらにひろい分布を示している。弓のなかったボルネオも槍は存在している。ただし、中国南部一帯に槍が欠けているのが注目される。狩猟用の槍 (1104) と武器としての槍の分布を重ね合わせてみる (図4) と、多くは併用されていることがわかる。そして、武器としてのみ槍を用いている民族もかなりみられ、それらの多くは狩猟をもはやおこなっていない民族 (たとえば **Cambodian** や **Javanese** など) であると考えられる。あるいは、弓などの他の用具を狩猟にもちい、槍を武器としている民族 (たとえばニューギニアからメラネシア、ポリネシアにかけての地域) である可能性もある。一方、狩猟用のみに槍をもちいる民族もなくはない。それらはナガ諸族から **Shan**, **Lamet** あたりと

ボルネオにみられる。この地域では、武器としては他のものが用いられていることを示しているであろう。

3. こん棒と刀剣

杉浦の仮説によれば、槍もブーメランも、こん棒、楯も一片の木切れから派生したものとされている [1954]。槍のきわめてひろい分布に比べるとブーメラン (2801) はオーストラリアにかぎられている (ポリネシアの Pukapuka にみられる例外があるが)。こん棒 (2805) は槍よりは分布はせまいが、各地にみられる。

このこん棒も、鉄器が出現すると刀剣におきかえられる可能性が強い。先のこん棒と刀剣 (2806) の分布を重ねあわせる (図5) と、Chin, Pulang あたりと太平洋地域 (フィリピンの Hanunoo, Tagalog をふくむ) のこん棒は鉄器とかかわらずに存在していることがわかる。そして、こん棒と刀剣を併用する民族よりも、刀剣のみを用いている民族の方が圧倒的に多い。おそらく、こん棒はもっとひろい分布をもっていたであろうが、鉄器の出現によって武器としてのこん棒は消えていったのであろう。

刀剣の分布をみただけに、製鉄技術 (2701) と刀剣の分布を一応重ねあわせておこう (図6)。この図をみると、意外にも製鉄技術なしで刀剣を使用している民族が多い。これは、ここでの製鉄技術の内容が問題であるが、おそらく銑鉄を造る技術はないにしても、鉄から刀剣を造る鍛冶屋は存在している場合が少なくないと思われる。それがなければまったくの交易品としか考えられないが、製鉄技術なしの地域のすべての刀剣が交易品とは考えにくい。また、この図中、製鉄技術はもっているが、刀剣は造らないという例がみられる。マダガスカル島や Angami Naga, Lahu, Achang, Laos Thai Yao, Semang, Redjang, Galela などがその例である。これらの民族では槍先や農具としての鉄製品などしか造らないのであろう。

クリス (2808) は刀剣の一種であるが両刃であること、刀身が波状であることによって容易に区別される刀剣である。実のところ先にあげた刀剣も、その形式から大陸部と島嶼部に大きくわけることも可能である。たとえば、大陸型のものは先端はとがらず、刀身は湾曲し、先端部で広がるものが多い。島嶼部の刀剣はその反対と考えてよい [清野 1943: 92]。しかし、この区別は個々のものについてはなかなか難しい。それにたいして、クリスはきわめて特徴的である。そして、このクリスはインド文明の影響化でジャワでつくられた独特のものであり、クリスの伝播はジャワからと考え

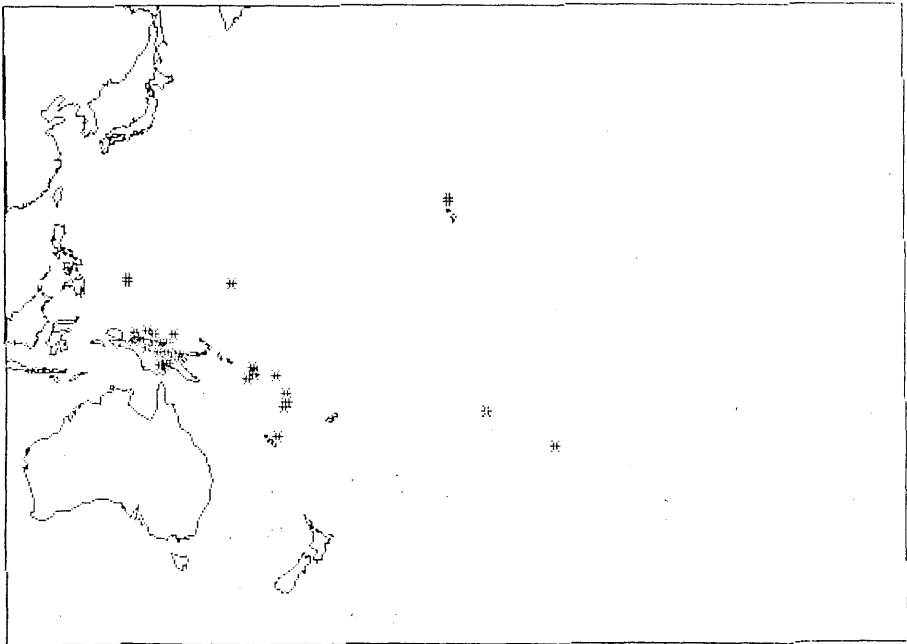
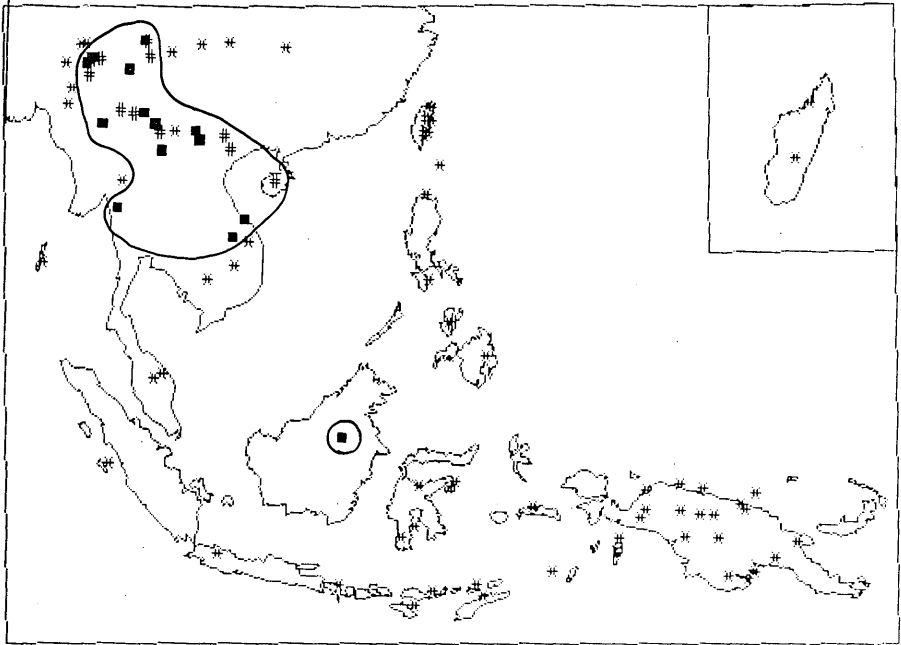


図2 いしゆみ (2804) と武器用弓 (2803)
■ いしゆみのみ, # 両方, * 弓のみ, ○ いしゆみの分布

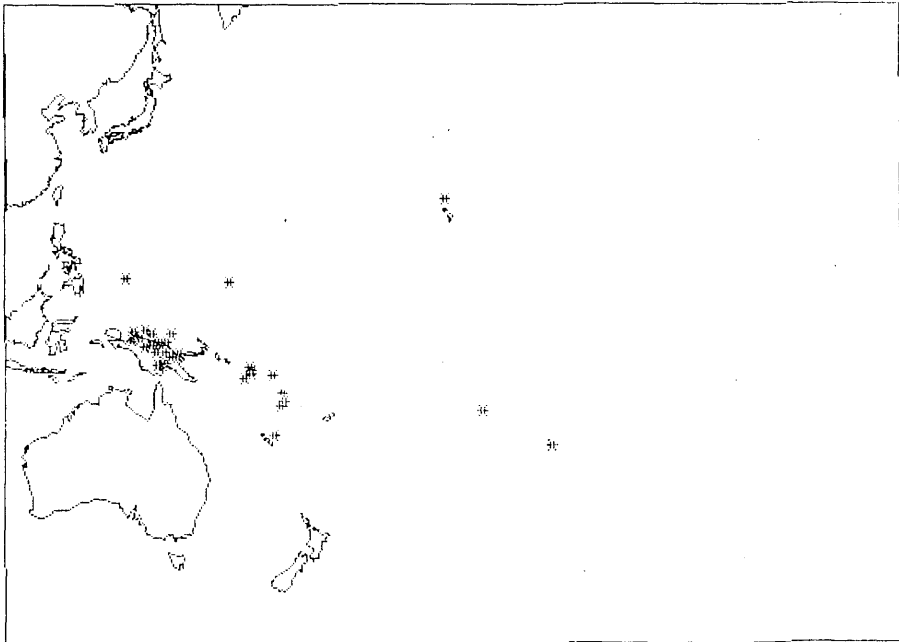
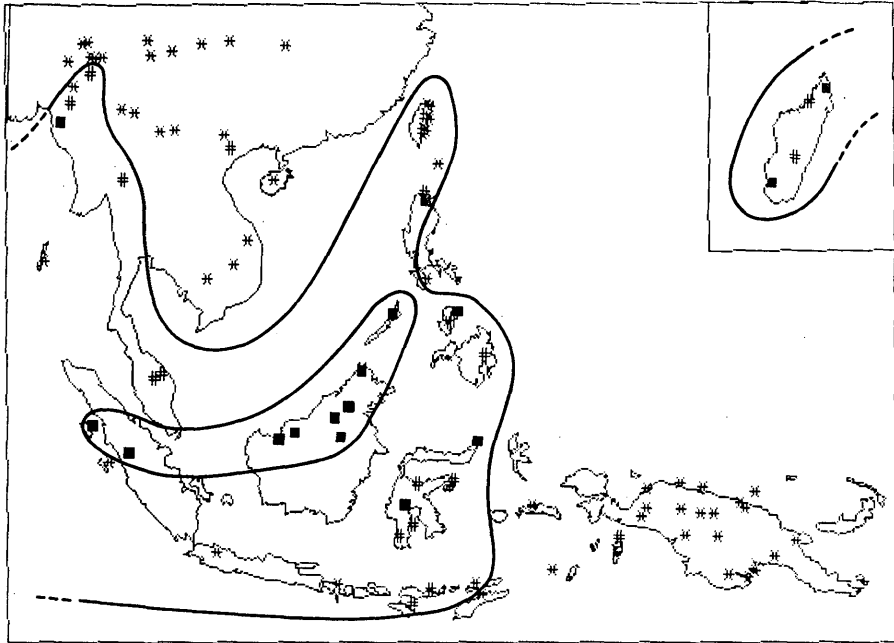


図3 吹矢 (1101) と武器用弓 (2803)

■ 吹矢のみ, # 両方, * 弓のみ

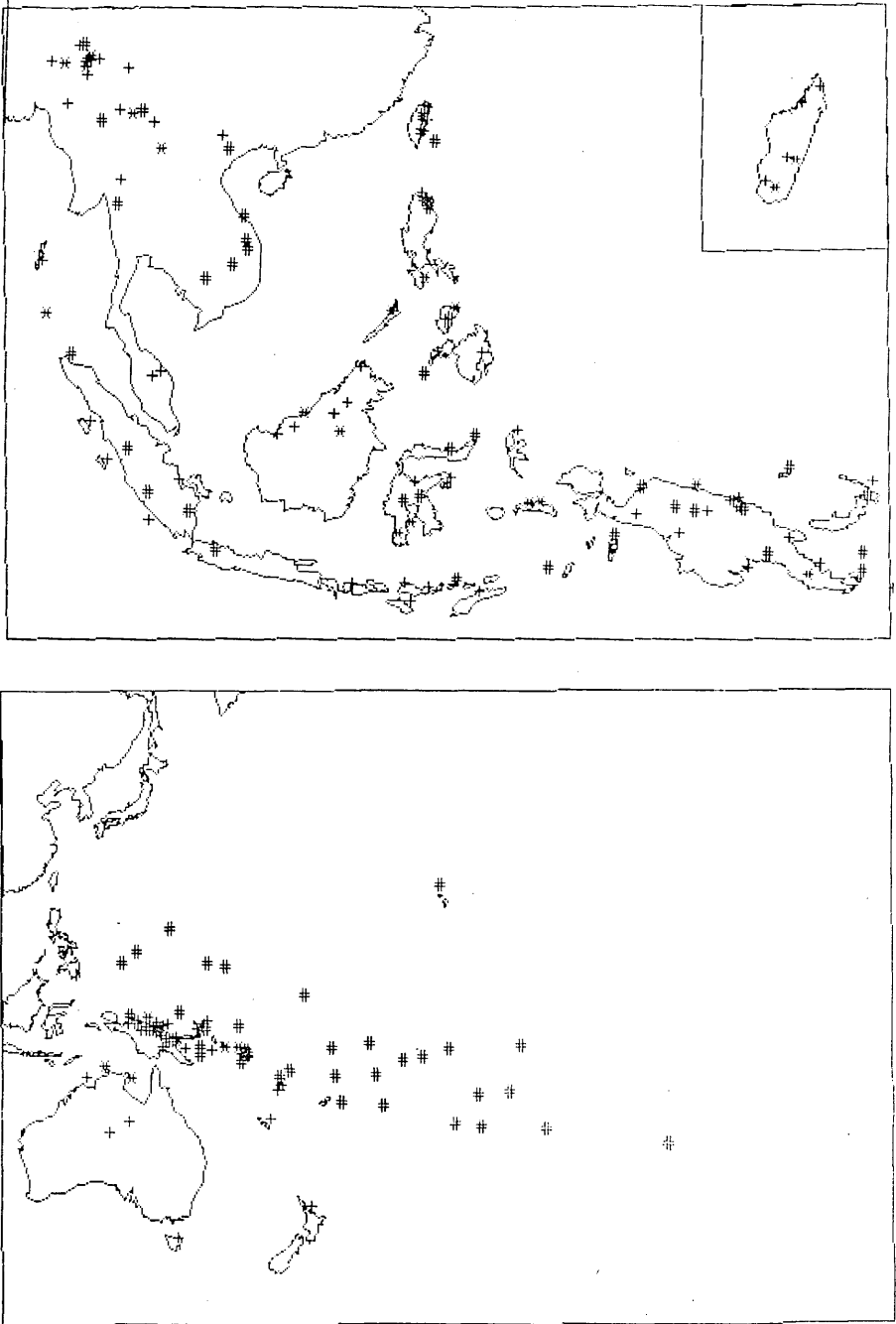


図4 武器用槍 (2815) と狩猟用槍 (1104)
+ 両方, ⊕ 狩猟用のみ, # 武器用のみ

られてよく、同時にジャワ文化の影響のおよんだ地域と考えてよい。ただし、クリスがあるとされている Lushai とニューギニアの Kwoma の 2 例は疑問である。

4. 楯

さて、楯にもさまざまな種類がある。その中で、とくに注目されるのは受け流し楯 (2811) である。先の杉浦によれば、この細身の楯がもっとも古いタイプの楯であるという。この分布をみると、ナガ地方と島嶼部の辺境、オーストラリアにみられ、杉浦の説を裏付けている。屋根状楯 (2813) や円形楯 (2812) はそれらよりは発達した楯であるが、現在の分布ではやはり辺境の地で用いられているだけである。

ところでそうした楯の形式分類をはずして、楯の有無 (2818) だけを問題にしてみると、全体としては高文明地帯よりも辺境の地に偏っていることが読みとれる。

楯は何と組みあわされて用いられているのであろうか。弓、槍、刀剣のうち、いずれが楯と組みあわさることが多いのであろうか。この 3 種の武器と楯との分布を重ねあわせてみると、楯と弓の組みあわせが一番低いように見える。しかし、いしゆみを弓にくわえると、この 3 者は、楯との組みあわせでそれほどちがわない結果となる。

しかし地域的には特色のある場合もある。たとえば、ナガ地方を中心とした地方およびニューギニアでは、楯は刀剣、槍、弓の 3 者と組みあわさる地域であり、スマトラ、ボルネオ、セレベス、小スンダ列島にかけての地域では、楯は槍、刀剣と組合わせられた地域とみることができる。楯が弓と結びつきにくいのは、たしかに地面に楯をたてかけて弓を引くということは可能であり、それも実際におこなわれていたことであろうが、機能性は楯と槍あるいは刀剣にくらべればずっと低いことによるのであろう (また、軽い楯で腕に通して持ち運べる楯もみられるが)。すなわち、槍や刀剣では片手に楯、もう一方に槍や刀剣をもって進むことができるからである。ただし、それは戦闘の形態にも深く関係していることと思われる。

5. よ ろ い

つぎによろい (2814) の分布をみてみよう。よろいをもつ民族はそれほど多くない (22 例)。そして、大陸部の方に多くかたむいている。ただし、よろいは高文明のものとはいえず、島嶼部ではむしろ辺境の地にみられる。よろいは楯とちがって身体に直接つけられる防具であり、その点、楯とことなり両手で武器を操作できる。すなわち弓にも適する防具ということになる。実際に弓+いしゆみとよろいの組みあわせの

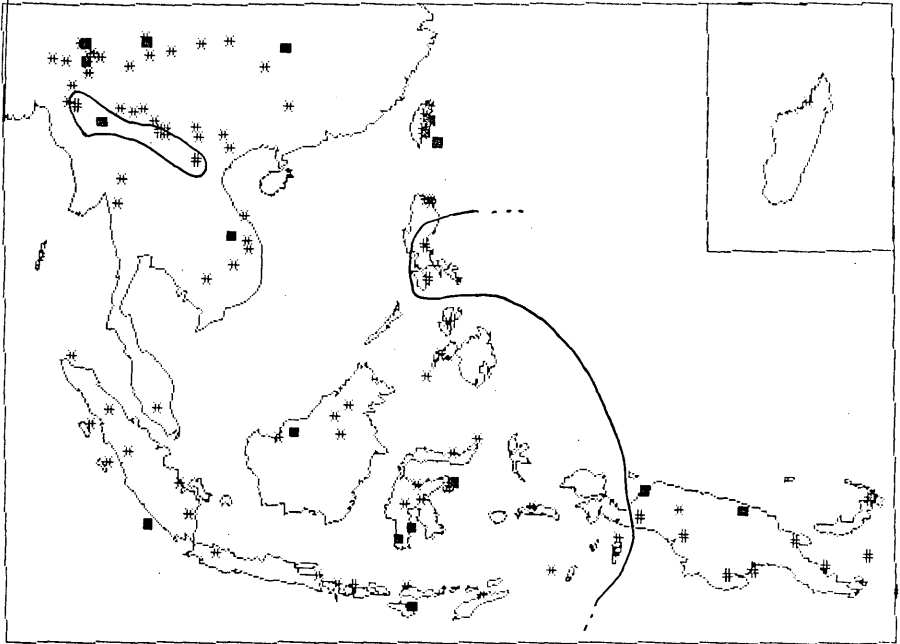


図5 こん棒 (2805) と刀剣 (2806)
■ 両方, * 刀剣のみ, ○ こん棒のみ

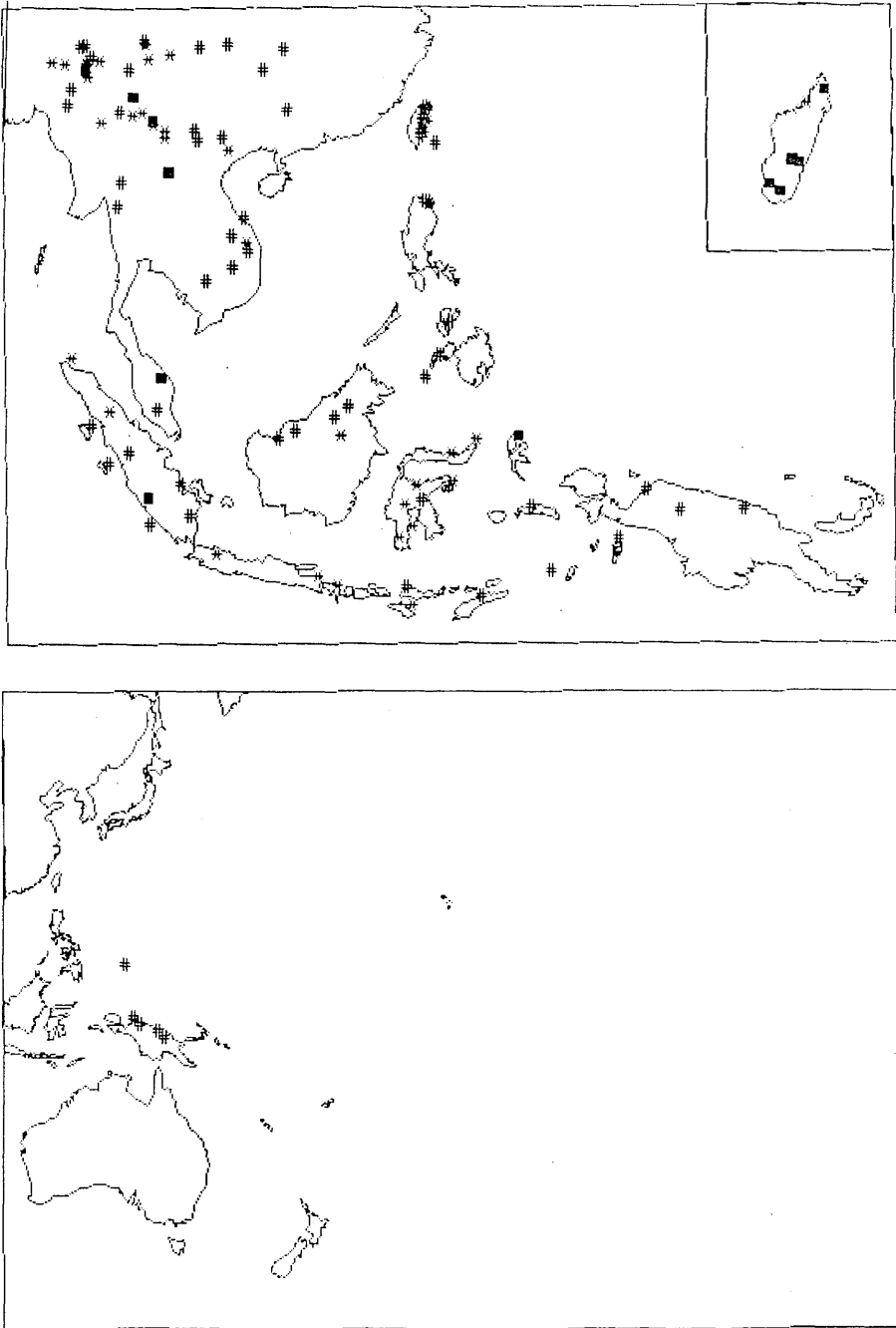


図6 製鉄技術 (2701) と刀剣 (2806)

■ 製鉄技術はあるが刀剣がない, # 製鉄技術はないが刀剣はある, ⌘ 両方ある

分布をみると、Laos Thai Miao をのぞいて、すべてその組みあわせとなっている。ただし、刀剣とよろいとの組みあわせも、弓ほどではないにしても高い重複率をみせ、無視できないものがある。

6. 投石器とサメの歯付き武器

最後に、投石器(2802)とサメの歯付き武器(2809)についてふれておこう。これらは基本的にはオセアニア要素の項目であるが、東南アジアやマダガスカル島にも分布がみられる。投石器ではマダガスカル島だけでなく、Lakher, Burmese, Mon, Lolo など、さらにスマトラの Minangkabau にみられる。ナガ地方とオセアニア地域とに分布する文化項目は少なくないが、これもその一つであろう。ただ、マダガスカル島が加わる点が特異的である。一方、サメの歯付き武器ではマダガスカル島、Lushai, Enggano, Bugis, Makassarese, Yami などにもみられる。Lushai をのぞけば、オセアニア要素の東南アジア残存型と考えてよいであろう。